

博士学位請求論文審査報告書

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 高萩 智也

論文題目 デイヴィッド・ヒュームの社会的な認識論

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員 柏端 達也

副査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員 上枝 美典

副査 国際基督教大学教養学部教授 矢嶋 直規

論文概要

本論文は、18世紀スコットランドの思想家デイヴィッド・ヒューム（1711-1776）の認識論を中心テーマとして、現代の更新されたヒューム解釈を踏まえつつ、そこにさらに著者自身の観点を加えようとする論稿である。著者は、単純にヒュームを極端な懐疑主義者とみなす古典的な「懐疑主義解釈」からより新しい「自然主義解釈」へと移行するヒューム研究の文脈の中で、従来より網羅的な（すなわち哲学者としてのヒュームに限られない）テキスト研究に立脚し、ヒュームの認識論の社会的側面に体系的かつ本質的な仕方で光を当てる。そこにおいて懐疑主義者としての古いヒューム像は、単に否定されるのではなく、懐疑論をめぐるヒューム自身の思索の再記述を通して定位しなおされる。本論文は二部構成であり、第Ⅰ部は、ヒュームの認識論を構成すると著者が考える重要概念（「記憶」、「想像力」、「因果推論」、「証言」）をそれぞれ吟味する四つの章から成る。「ヒュームにおける認識の社会性」と題された第Ⅱ部では、ヒュームの思想において、第Ⅰ部で論じた人間の知性的能力や能動的認識活動に対して重要な社会的制約が課せられていることが、包括的なテキスト読解を通じて論証される。

論文の構成は次に示すとおりである。

論文の構成

序論

1. 本論文の主題と課題
2. 研究史と本論文の目的
3. 本論文の方法
4. 本論文の構成

第 I 部 ヒュームの認識論

第 1 章 表象能力としての「記憶」

第 1 節 ヒュームの観念説

1. 知覚とその第一原理
2. 「連合原理」と「分離原理」

第 2 節 「記憶」をめぐる『人間本性論』の二つの議論

1. 『人間本性論』第一巻第一部の記憶論
2. 『人間本性論』第一巻第三部の記憶論

第 3 節 「記憶」のデフレ解釈

1. 伝統的な批判
2. 「記憶」をデフレする

第 2 章 外的世界を心のうちに再構築する「想像力」

第 1 節 構想的な能力としての想像力

1. 認識の構想性と、構想能力としての想像力
2. 想像力が形成する三つの複雑観念

第 2 節 「関係」とは何か

1. 二種類の関係: 「哲学的関係」と「自然的関係」
2. 認識のユニットを構成する七種類の「哲学的関係」

第 3 節 「哲学的関係」と「自然的関係」を区別する

1. 認識説とプロセス解釈
2. プロセス解釈批判
3. デフレ説の批判的検討
4. 認識説の擁護
5. 人間に固有の自然としてあらわれる「関係」

第 3 章 「因果推論」による信念の獲得と修正

第 1 節 原初的な因果推論

1. 心の習慣としての因果推論
2. 因果推論の原初性
3. 因果推論の三つの性質: 非反省性・即時性・受動性

第 2 節 因果推論の修正

1. 一般規則の存在

2. 一般規則を修正する一般規則
3. 二つの一般規則の連続性

第3節「蓋然的推論」と「判断力」のプリエンプション

1. 蓋然的推論の反省性
2. 蓋然的推論の手続き;判断力のプリエンプション

第4章 経験を拡張する「証言」

第1節「証言」に関するヒューム自身の議論

1. 因果推論の一種としての証言
2. 軽信を咎める
3. 証言された内容を吟味検討する二つのプロセス:ロバート・フォグリンの提案

第2節 還元主義解釈をめぐる議論

1. コーディの解釈と批判
2. コーディの批判への応答

第3節 ヒュームにおける証言の認識論

1. ヒューム自身の立場
2. 規範的一般規則を共有する

第II部 ヒュームにおける認識の社会性

第5章 「全面的懐疑論」と認識活動の根本的な社会性

第1節 最終的帰結としての「理性に関する懐疑論」

1. 理性に関する懐疑論の構造
2. 理性に関する懐疑論への応答

第2節「結論」における「全面的懐疑論」

1. 「全面的懐疑論」とはどのような種類の懐疑論か
2. 「結論」において「全面的懐疑論」を導出する議論
3. 「結論」の「全面的懐疑論」のその後

第3節 資格原理解釈

1. 資格原理とは何か
2. 資格原理のプラグマティックな正当化

第4節 認識の可能性の条件としての他者との関わり

1. 「結論」の二つの文脈
2. 「絶望的な孤独」という病理

3. 認識活動において推奨される孤独

第6章 学問的な認識活動を動機づける「真理愛」

第1節 学問的追究を動機づける情念としての「真理愛」

1. 主題の限定；「好奇心」とは区別された「真理愛」
2. 真理愛を生じさせる二つの快と、学問的な認識活動の対象となる真理

第2節 継続的な探究を動機づける条件としての真理の重要性と有用性

1. 真理の重要性と有用性に対する懐疑論
2. 真理の重要性と有用性が注意を固定する仕方

第3節 ヒュームの学問観

1. ピュロン主義哲学に対する批判
2. 人間本性に関する真理の効用

第7章 学問的な認識活動における「行儀の規則」

第1節 「行儀の規則」の目的と内容

1. 社会の効用と必要性、そして形成過程
2. 「行儀の規則」の趣旨
3. 行儀の規則の豊かな内容

第2節 「行儀の規則」をめぐるこれまでの解釈の検討

1. 林誓雄の解釈
2. エンリコ・ガルヴァーニの解釈

第3節 持続的な相互交流の場における規則としての行儀の規則

1. 会話の流れ
2. 私たちは時に誇りを積極的に表現しなければならない

結論

各章の要約

本論文は大きく二つの部分から成る。すなわち、ヒュームの認識論の中核と著者がみならず諸概念について論じた四章構成の第Ⅰ部と、第Ⅰ部で検討した中核的な諸概念と思想にあるいみ社会的な制約が課せられていることを包括的なテキスト研究によっていっそう明らかにしていく第Ⅱ部からである。

各章の概略は以下のとおりである。まず第1章「表象能力としての「記憶」」では、ヒュームの「記憶」概念が検討される。ヒュームの認識論において、記憶は、あくまで印象を

観念として心のうちに表象／再現前させる能力である。そこでは、記憶による想起は認識未満のものとみなされる（ヒュームの記憶論のデフレ的な解釈）。本章の主張によれば、それはヒュームの「認識」観と呼応している。すなわちヒュームにとって認識は、外的世界についての情報を認識主体が（記憶以外の能力も併せて動員することによって）能動的に構築する営みなのである。

第2章「外的世界を心のうちに再構築する「想像力」」は、ヒュームの「想像力」概念について論じた章である。ヒュームによれば、想像力は心が外的世界を能動的に再構築する能力である。認識とは、物体や出来事を互いに関係づけて理解することにほかならず、そのために想像力が必要とされるというわけである。ヒュームは、認識される関係には「自然的関係」と「哲学的関係」の二種類があるとする。本章においては、そのうち哲学的関係こそが認識活動の到達点であり、そこにおいて人間固有の能力が発揮されるというヒュームの見解が描き出されることになる。

第3章「「因果推論」による信念の獲得と修正」では、ヒュームの言う因果推論が考察される。因果推論は、ヒュームの論じるところでは、経験できない対象や出来事を知るための手段であり、動物や幼児にも行なえる原初的な認識活動である。また、因果推論はその原初性ゆえに誤認や偏見をもたらす可能性があり、それゆえ私たちは正しい認識にたどり着くために自らの信念をたえず修正していく必要がある。ヒュームにとって認識は継時的進行を伴う営みであり、基本的な認識活動である因果推論もちろん、その種の時間性を含むことになる。

ヒュームは「証言」を因果推論の一形態とみなしている。第4章「経験を拡張する「証言」」では、証言と知識の獲得に関するヒュームの立場が検討される。ヒュームは、証言に基づく知識獲得の可能性を否定してはいないし、あらゆる認識に直接的な経験や観察が必要であるとも論じていない。本章では、ヒュームにとってはむしろ、証言が単なる事実の伝達手段にとどまらない認識の規範や方法そのものを伝える手段なのだとする解釈が提案される。

第5章以降が、ヒュームの認識論の本質的な社会性に光を当てる第Ⅱ部である。

第5章「「全面的懐疑論」と認識活動の根本的な社会性」で問われるのは、なぜヒュームが、『人間本性論』の第一巻の本論において全面的懐疑論を否定したにもかかわらず、その結論部では全面的懐疑に陥ることを避けられなかった（かに見える）のかである。本章は、この経緯の背景にある「絶望的な孤独」の感情に注目する。そして、いくつかの文献的証拠を手がかりにして、ヒュームが認識活動を相互承認に基づく社会的な営みと考えていたことを詳らかにする。

第6章「学問的な認識活動を動機づける「真理愛」」では、ヒュームの「真理愛」と「好奇心」という情念が取り上げられる。従来の研究では、真理の追究に伴われる快樂がヒュームの体系における真理愛の本質だとされてきたが、本章は、追究される真理の重要性と

有用性こそがヒュームにとっては真理愛の本質的条件を成していると主張される。そして、それらの条件が、学問的動機づけとしての真理愛を介して、認識活動の経時性にとって不可欠なものとされると論じられる。

最終章の第7章「学問的な認識活動における「行儀の規則」」は、ヒュームの「行儀の規則」に関する議論を扱う。誇りは、快く有益な情念だが、過度に表現されると他者との関係を損なう。そのため、礼儀作法やマナーといった行儀の規則が誇りの表現を適度に抑え人々の行為を制御する役割を果たす。行儀の規則は認識論にとっても重要な意味をもつ。なぜならそれは、他者との知識の交換や、本質的に社会的な認識活動を行なうさいの重要な要素となるからである。本章では、従来見落とされてきた会話の流れに関するヒュームの議論に注目することによって、誇りの表現がむしろ望ましい場合もあるという新たな視点を導く。

審査要旨

18世紀のスコットランドの思想家デイヴィッド・ヒュームを論じた本学位請求論文は、ヒュームの認識論を中心的なテーマにし、先行するヒューム解釈研究や、関連する現代の哲学的議論をも踏まえながら、そこにヒューム哲学の「社会性」という著者自身の論点を加えることを試みた意欲的、挑戦的な論稿である。

二部構成である本論文は、第Ⅰ部こそオーソドックスに『人間本性論』第一巻と『人間知性研究』におけるヒュームの議論を中心にして考察を進めているが、第Ⅱ部では『人間本性論』の他の巻や『道徳政治文学論集』、『道徳原理研究』、さらには複数の書簡などをも基底的なテキストに含め、より包括的で網羅的な視点からヒュームの思想全体を捉えようとしている。こうしたテキスト研究の範囲の広がりには著者独自のものであり、「社会的な認識論」と呼ぶべき新しいヒュームの読み解き方を説得的に可能にしている。それによって、伝統と膨大な蓄積があり我が国においてもきわめて層の厚いヒューム研究のなかで、著者の高萩君の考察が一定の新奇性を獲得しえている点は、審査委員会においてとくに高く評価された。

またヒューム研究にとどまらず、今日の非個人主義的な認識論や、現代的な学問論、社会規則論のさまざまなトピックへの接続が論文全体で示唆されている点も、高萩君の研究姿勢の特色の一つとして評価された。

以下に、より詳細に本論文の章構成に沿って評価点を挙げていく。

第1章はヒュームの「記憶」概念を論じた章である。本章で著者の高萩君は、ヒュームの記憶論における「記憶」の役割を従来の解釈に比べてより慎重に制限している。その解釈は著者固有のものであり、本論文においては「デフレ解釈」と呼ばれている。ヒュームの記憶論のデフレ解釈のもとで、記憶は、もっぱら外的世界の情報をそのまま心に表象す

る機能として規定される。そうして、記憶だけでは認識と呼べる状態に至らない（記憶は認識の材料を提供するにすぎない）という点が強調される。本論文全体の文脈では、この論点はむしろ、ヒュームの認識論の明確化にあたり、「認識」が単なる受動的なプロセスではなく観念の組み替えや信念の修正を含む能動的活動である、ということを示す意味をもっている。

第2章では「想像力」についてのヒュームの考えが検討される。とりわけ、ヒュームの関係論がそこではテーマになる。想像力は、ヒュームによれば、能動的な認識活動においてさまざまな物体や出来事を関係づけるために不可欠なものだからである。テーマとしてあまり注目されることのなかった関係論を集中的に論じている点で、著者のアプローチはまず評価することができる。また、ヒュームの規定する「自然的関係」と「哲学的関係」のうち、後者こそが人間の認識活動がめざすべき到達点とみなされるという著者の解釈にも一定の説得性が認められる。

第3章では「因果推論」の概念が取り上げられる。因果推論についてのヒュームの考えをめぐる議論は伝統的に数多くあるが、著者の高萩君のアプローチは、因果推論を懐疑論と結びつけない、より近年の読みを踏襲したものになっている。高萩君の解釈によれば、ヒュームにとって因果推論は、経験できない対象や出来事を知るための原初的な認識活動の手段である。それは、原初性ゆえに誤りを含みうるものであり、そのため、認識活動はたえず修正を必要とする動的な過程として捉えられることになる。こうした「知識獲得のための動的過程」というヒューム認識論に対する描き方は、本論文において一貫しており、それは次章の証言論の解釈にも自然につながっていく。

続く第4章では、証言と知識の獲得に関するヒュームの議論が検討される。そこで著者は、証言を、事実の単なる伝達手段としてではなく、認識の規範や方法（規則に関する知識やknowing-how）をも伝えうる手段とみなす解釈が提起される。これは、「証言」に関するヒュームの見解についての積極的な解釈の提案であり、また、現代の非個人主義的な認識論のトピックにも接続しうる啓発的な内容の提案と評価できる。現代的な議論の流れを踏まえつつ、そこでの問題関心に一方的に引きずられることなく、あくまでヒューム論の文脈で議論を展開しようとしているところも、著者の姿勢の明確さをよく反映していると言える。

第5章では本論文における著者のアプローチの特長を鮮明に確認することができる。本章で著者は次のような「謎」を提起する。すなわち、ヒュームは『人間本性論』第一巻の本論において全面的懐疑論を否定したにもかかわらず、その結論部で全面的な懐疑に陥っているかに見える。これはいったいどういうことか。著者の高萩君は、関連する書簡などをも根拠にして、ヒュームの目的がむしろ、「絶望的な孤独」という病理を、そして認識活動の根本的な社交性を描き出して見せることにあったという斬新な読みを提示する。

第6章は「真理愛」の情念を論じた章である。本章では、従来の解釈と異なり、ヒュー

ムにとっては、真理の重要性と有用性こそが真理愛の本質条件を成すと主張される。この章で著者は、ヒュームによるピュロン主義批判の吟味を通して、ヒュームのメタ哲学的な問題関心を浮き彫りにしており、それはこれまでにないユニークな観点の提示として評価できる。

第7章で著者はヒュームの「行儀の規則」に関する議論に注目する。そこでは、ヒュームの言う「行儀の規則」が、単一の行為についての規則にとどまらず、広く社交や会話の場を統制するための規則でもあることが示される。その論点はもちろん、ヒュームの認識論と情念論の社会的側面を描く本論文の趣旨を反映したものである。

上記のとおり、高萩君の学位請求論文は、首尾一貫した姿勢でヒュームの哲学に対して新しい解釈の視座を提示しようとする論稿である。各章の叙述がそれぞれ興味深い論点を含んでいることは審査担当者から高く評価された。ただし、そうした高評価にもかかわらず、読者の視点で見たときに感じられる疑問点や、いっそうの議論の展開を要求したいと思われる点が、いくつか指摘された。

一つには、叙述の巧みさゆえに目立たなくなっているものの、各章の深いレベルでの相互関係が（とりわけ後半の章に行くほど）かならずしも明確に論じきれていないという点が挙げられる。また、本論文のテーマにとって重要と思える仕方で登場する用語が、論文全体では十分に活用されていないという点も指摘できる。もしも各章やキーターム間のより有機的なつながりを示せていたならば、本論文はさらに可読性の高いものになっていただろう。指摘されたもう一つの論点として、あくまでヒューム解釈の文脈で論じようとする意図は理解できるものの、現在哲学の話題と関連づけるさいには、やはり今日の標準的な定式化（たとえば「還元主義」、「非還元主義」などの）を著者なりに提示し、それとの異同を明示的に述べることを期待される、という点が挙げられる。さらに、ヒューム論として見たとき、本論文のオリジナルな視点とアプローチは評価できるが、慎重に制約されたヒューム像から、たとえばヒュームの宗教論などとの関係へと視野を広げていくことが自然な展開としては期待されるといったコメントもあった。

とはいえ、指摘すべき以上の諸点はいずれも、高萩君が打ち出した視座の発展可能性とそれに対する期待によって誘発されたものである。全体として見れば、本学位請求論文が高い学術水準と独創性および堅実性を備えていることはまちがいない。よって、本審査委員会は高萩君の本論文を学位授与にふさわしいものと判断する。

令和7年6月4日 審査担当者一同